

フランスにおける柔道の普及振興策 ー特に、初心者指導を中心にー

The Promotion Policy of Judo in France : Focusing on The Instruction for The Beginners

小 山 泰 文, 杉 山 重 利, 齊 藤 仁

Yasufumi KOYAMA, Shigetoshi SUGIYAMA and Hitoshi SAITO**

I. は じ め に

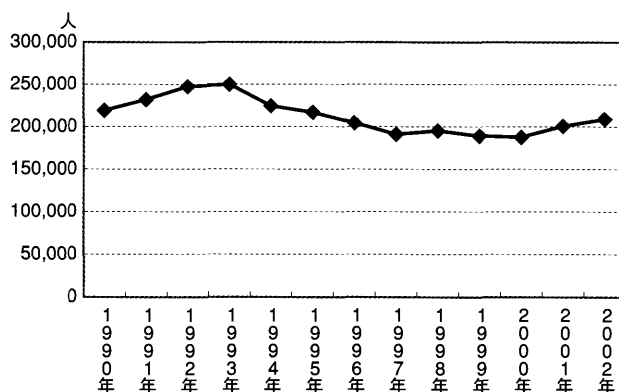
我が国の伝統的な運動文化である柔道は、国際的な普及を遂げており、特にフランスにおいてはその傾向が著しい。

ところが、我が国における柔道人口は、図1に示したとおり、20万人前後を推移し、横ばいもしくは減少傾向にあるといえる。特に小学生以下の人口は、柔道における他の層と比べると、図2に示したとおり、1993年に101,931人でピークであったのが、2002年には47,001人と半数以下に減少している。

一方、フランスにおいては、対照的に増加傾向にあるといえ、最も多い4歳から9歳の柔道人口は、図3に示すとおりである。このように、フランスにおける柔道人口は、1996年に55万人を超え、連盟のライセンス所持者の数で、サッカー(200万人)、テニス(80万人)に続き第3位であることが報告されている(関根清文・永田千恵、1997)。また、そのうちの75%が15歳以下の子どもたちであり、各国との比較は単純にはできないが、国内の普及・発展の度

合いを考えると、フランスにおいて柔道は“メジャースポーツ”として確かな地位を得ているといえてよい(関根清文・永田千恵、1997)。さらに、2003年世界柔道選手権大会においては、世界柔道国別団体トーナメント男子の部における優勝のほか、銀メダルを5つ獲得するなど、競技レベルも上位であるといえる。

柔道は、我が国の伝統的な運動文化であるといえるが、その人気度、つまり国内の普及、発展の度合いは他のスポーツに比べ低下しつつあると言わざるを得ない。この柔道人口の減少の要因は、



(財)全日本柔道連盟より資料提供

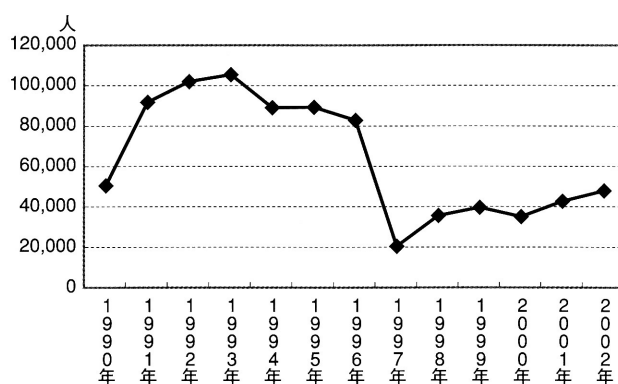
図1 我が国における柔道競技者人口の推移(1990年から2002年)

少子化という社会問題にも影響しているといえるだろうが、少子化が国際レベルの問題であることを考慮すれば、人口減に比例した自然減少だけとはいえず、指導方法や愛好者の意識が影響していると考えられる。このことについて、徳田ほか(1988)は、柔道はあまり幼年期から練習しても効果がない、さらには健全な発育発達に有害である、あるいは柔道は現代の児童の興味・関心にそぐわない(痛い・こわい・スタイルが悪くなる、などのイメージ)といった印象がもたれやすいと述べている。

他方、フランスでは、柔道は単なるスポーツのひとつとしてとらえられているのではなく、自己防衛、特に子どもにとっては特別の教育的価値を持ったスポーツとしてとらえ、FFJDA(以下、「フランス柔道連盟」と略す)ではそういった側面からマスコミ等を通じてプロモーション活動を行い、一般に関心を持たせようとしてきたという経緯がある(関根清文・永田千恵、1997)。また、練習は遊び感覚を取り入れたものが中心で、“崩れ袈裟固

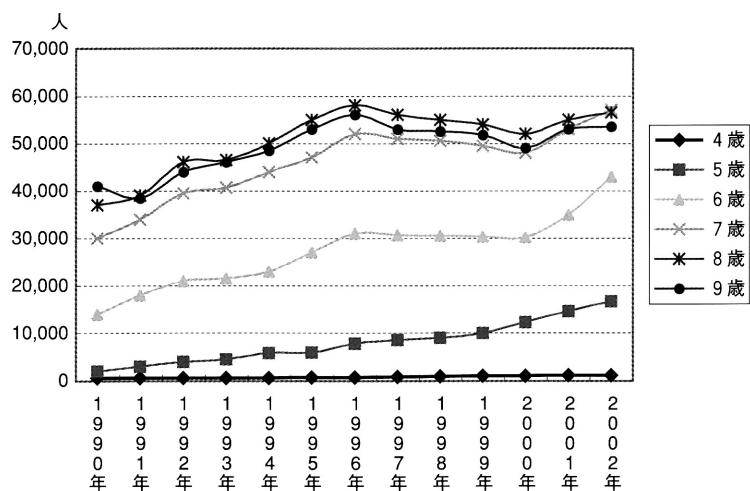
め・大外刈り・体落とし・内股・浮き腰・一本背負い投げ・出足払い・巴投げ」といった8つの技からなるシールと“礼儀・謙虚・尊敬・誠実・勇気・自己コントロール・友情・名誉”といった8つのシールをできたものから貼っていく「パスポート」も用意されている(関根清文・永田千恵、1997)。このように、フランスにおける指導方法は、我が国と異なる点が数多くみられる。

そこで本研究は、我が国における柔道の普及振



(財)全日本柔道連盟より資料提供

図2 我が国における小学生以下の柔道人口の推移(1990年から2002年)



FFJDA (2003) より参照

図3 フランスにおける4歳から9歳の柔道人口の推移(1990年から2002年)

興策に関する基礎的研究として、柔道人口が最も多く、しかも年々増加傾向にあるフランスの実態について、フランス柔道連盟が作成し、影響力が強いと考えられる指導者マニュアル「METHODE FRANCEAISE D'ENSEIGNEMENT DU JUDO-JUJITSU」（以下、「フランスにおける柔道の教授方法」と略す）およびフランスの柔道愛好者に対するアンケート調査から明らかにすることを目的とした。特に、我が国においては小学生以下の柔道人口が著しい減少傾向にあり、今後の普及振興を踏まえると、指導者マニュアルは、最も登録者数の多い6歳から9歳のマニュアルを採用し、その教育的アプローチと技の配列について述べたいと考える。

Ⅱ. 指導者マニュアル

フランスでは、大人の柔道を子どもにも共有させるのではなく、子どもの目線で考え、理解し、子どもにあった楽しみが満足できる指導を目指している（FFJDA、1998）。そこで、フランスにおける柔道の指導方針を明らかにするために、フランス柔道連盟が作成した指導者マニュアル「フランスにおける柔道の教授方法」における教育的アプローチについて説明する。以下は、「フランスにおける柔道の教授方法」における6-9歳の教育的アプローチである（FFJDA、1998、pp. 1-2）。

6-9歳 教育的アプローチ

6-9歳の柔道人口が増加している。

6歳の子どもにとって、初めてスポーツに触れるであろうから、先駆者としての役割がある。新しい状況に入っていく際の状況にきちんと沿った、さまざまな問題を解決するための注意点を確認しなければならない。

技を単純化して教えるのは、幼い柔道家を大人の前段階と考えて、大人の前の小さい大人として考え、より年長の柔道家を模倣するというミニ柔道を6歳の子に与える。それもより集中的ではな

いやり方で、濃い内容ではないやり方、また遊びも取り入れて教える。

けれども、われわれが考える教育は、それ以上に彼らの心理的、生物学的特徴を取り入れて、十分考慮して考えないといけない。つまり、その年齢に固有の教育があるのだ。

だからといって、プレ柔道の実践方法、トップの指導員と実地の協力を得てフランス柔道連盟の調査委員会がまとめたこの年齢に適合する教育的アプローチを公示しようとするのではない。また、練習の仕方を決まったものにするのではなく、画一化するのではない。

われわれの目的は、ある年齢から始まる柔道というもののからの離脱という問題を解決することではない。なぜなら、われわれは、体系的に優秀である柔道家を早くから育てる意図は持っていないからである。ただ、6歳-9歳の教育に柔道というものを一つの教育の方法として用いて、そこに参加させたいだけなのである。こうした観点から方法として用いているだけなのである。柔道というのは、未来のスポーツとして、厳格に選ばれた基本的な方針なのではなく、基本的教育の一部であると考えている。われわれが、柔道の教育者たちに喚起したいのは、6歳-9歳の子どもに柔道を真剣に捉えさせるということがあるとすれば、それは、それぞれの柔道クラブの勧誘の年齢を引き下げることではなく、クラブを楽しませるのではなく、柔道を一般的な普遍的な教育の問題解決に近づくための方針の一つとして捉えているからなのだ。

この指導方針のもと、もっともこの考えが反映されている指導方法のひとつが技の配列・分類であった（表1）。

無数にある技の中から、初心者に提示する技をどのように選ぶかはきわめて重要なことである。

初心者指導において取り扱う技として明示されているものに、日本とフランスでは相当な違いがある。日本では、上級者の指導においても取り扱

わない技をフランスでは、初心者うちに、首投げ、足車のほか、腰車、谷落し、後腰、横巴投げ、手車についても扱うことになっている。

柔道の投げ技については、「崩し」と「体さばき」の関連で技が分類されている点は、日本およびフランスとも同様であるが、異なっている点は、フランスの場合、さらに8つに分類され、最初の5つは、主に、「受け」と「取り」の位置関係により、後の3つは、相手を投げる際の「取り」の動作によって分類されている。さらにその上に、技の学習の順番が「取り」にとって技を掛ける際の難易度と、「受け」が投げられる際の安全性という2つの基準によって分類され、それがまとまった形で示されている。

さらに、実際の練習方法についても、日本は基本技能の取得を目指した「個人練習」に重心がおかれているのに対し、フランスでは、実践的な練習、つまり対人的技能の取得を目指した「相対練習」が中心に行われている（FFJDA、1998）。特

に「打ち込む」についてフランスでは、『打ち込み』をトレーニングの一般的なやり方として実践したとしても、この『打ち込み』によって技が将来上手になるという建設的な考えに立つことができない。6歳から9歳の子どもたちが、ある内容を繰り返すためには、実践の目的や効果を理解する段階になっていなければならない。うんざりすることにしかない。」（FFJDA、1998）と「打ち込み」を否定しているなど日本の練習方法に対する考え方と異なる。

したがって、試合に必要な技を中心に、加えて、子どもの興味・関心を重視して分類し練習を行っているものと推察される。

Ⅲ. アンケート調査

1. 調査方法

1) 期日・対象

調査は、2003年11月中旬から12月上旬にかけて

表1 フランスの進級別投げ技チャート

分類基準 帯の色	白-黄色(7歳)	黄色(8歳)	黄-オレンジ(9歳)	オレンジ(10歳)	オレンジ-緑(11歳)	緑(12歳)
前投技 相手に前向き 支えて	(1) 形	膝車 支え釣込み足				
前投技 相手に背中を向けて 両足を開いて	(2) 形	体落とし 足を開けての 背負い投げ 首投げ				
前投技 相手に背中を向けて 両足を狭く		浮腰	大腰 一本背負い投げ	腰車 双手背負い投げ 襟背負い投げ	釣り込み腰 袖釣り込み腰	後腰
前投技 相手に背中を向き 支え			足車	払い腰	内股	
後投技 相手に前向き 支え	(2) 形	大外刈 小外刈 大内刈 小内刈	正確度を求めた一違った技(落とし、刈り、掛け、払い)			
払う			送り足払い	出足払い		
捨身 (身を任せ)					谷落し	巴投げ 横巴投げ
足を捕まえ 投技						手車

(FFJDA、1998、p.15)より参照

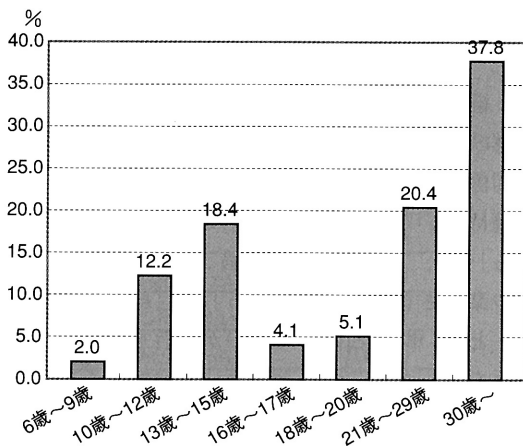


図4 被調査者の年齢

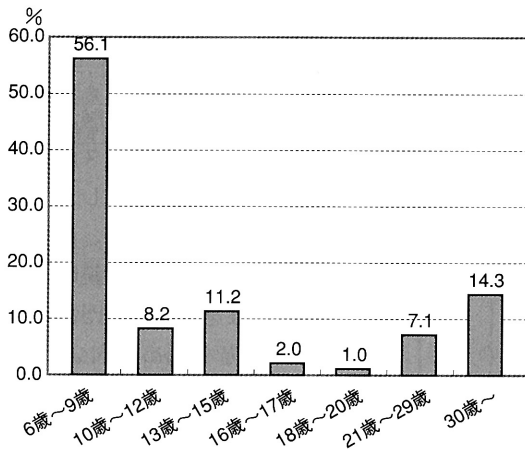


図5 被調査者の柔道の開始年齢

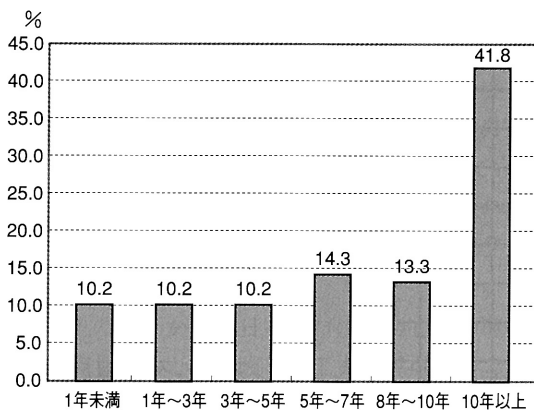


図6 被調査者の柔道の継続年数

実施した。被調査者は、フランスに母体をおく柔道のクラブ（3クラブ）に所属する100名で、そのうち有効回答は、98通（98%）であった。

2) 調査票の作成

調査票は、性別、年齢、柔道を始めた年齢、継続年数といった被調査者の属性のほかに、「あなたはなぜ柔道を行っているのか」という継続動機についても質問した。調査項目の選定は、右近（2003）による継続動機に関する調査票における構成因子の中でもっと因子負荷量の高い項目を中心に抜き出し、その後、柔道の専門家間で項目内容を検討し決定した。なお、「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」、「わからない」という5段階の選択肢が設定されており、簡便法に基づいて得点化がなされた。また、逆転項目は存在しない。さらに、「総合的な継続性」として「今後も柔道を続けたいと思いますか」という設問を設定した。フランス語訳にあたっては、フランスに長期滞在経験のある柔道の専門家に依頼した。

3) 統計処理

本研究における統計解析の手続きは、SPSS 11.0 J for Windowsに依り、なお、有意水準は $P < 0.05$ とし、有意性を判断した。

2. 結果と考察

1) 被調査者の属性

被調査者の内訳は、男性が71.4%、女性が28.6%であった。また、年齢は、30歳以上がもっとも多く、次いで21歳～29歳であった（図4）。さらに、柔道を始めた年齢は、6歳～9歳が最も多く、図3の傾向を裏付ける結果となった（図5）。図6は、柔道の継続年数を示しているが、多くの競技者が10年以上続けているといえ、フランスの柔道が長期に渡って続けていく環境が整っていると推察できる。

2) フランスにおける柔道愛好者の継続動機

表2は、フランスにおける柔道愛好者の継続動機について調べた結果である。そのうち、「非常

にあてはまる」、「ややあてはまる」と答えた割合の合計が高かったのは、「9. 格闘技にあこがれているから」(84.7%)、「8. 柔道着がかっこいいから」(79.6%)、「7. 健康のためによいから」(78.6%)、「11. 体力をつけたいから」(78.6%)であった。一方、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」と答えた割合の合計が高かったのは、「15. 好きな柔道選手がいるから」(21.4%)、「6. チャンピオンになりたいから」(44.9%)、「12. 休日を楽しく過ごしたいから」(49.0%)であった。このことから、柔道に対し強い憧れを持っており、競技志向というよりは、楽しさや雰囲気重視し、それが継続的に参加する動機になっていると伺える。また、柔道を行う

ことによる健康的な効果も期待しているといえよう。

3) 継続動機と「総合的な継続性」との関係

継続動機の各項目と「総合的な継続性」との相関関係を調べた(表3)。その結果、「2. 向上心を高めたいから」「9. 格闘技にあこがれているから」「10. 友だちと一緒に過ごしたいから」「13. 勝つ楽しさを味わいたいから」が「総合的な継続性」と強い関係とはいえないが、有意な正の相関関係を示した。このことから、強い憧れを持って柔道クラブに通い、柔道を行うことによって心身を成長させ、また、勝つ喜びを味わうことが継続的に柔道を続ける要因となることを推察できる。つまり、将来も継続的に柔道を続けようと思う要

因は、柔道や格闘技といった雰囲気への憧れに加え、友人関係や成功体験が影響するといえ、他のスポーツの継続要因と類似した傾向にあるといえよう。しかしながら、以上の手続きからは推察を脱しないため、今後研究を進めるにあたって、再度フランスにおける柔道愛好者の継続動機の因子構造を明らかにし、「総合的な継続性」との関係を重回帰分析を持って分析し、標準回帰係数を算出することによって「総合的な継続性」に対する影響因子を明らかにする必要があるだろう。

IV. ま と め

「フランスにおける柔道の教授方法」とフランスにおける柔道愛好者へのアン

表2 継続動機の集計結果

項 目 \ 選択肢	非常にあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	わからない	無回答
1 柔道選手になりたいから	35.7	23.5	14.3	22.4	3.1	1.0
2 向上心を高めたいから	43.9	32.7	9.2	2.0	11.2	1.0
3 試合に出たいから	44.9	21.4	10.2	16.3	3.1	4.1
4 友だちができるから	36.7	33.7	17.3	9.2	2.0	1.0
5 新しい経験を試みたいから	54.1	19.4	9.2	9.2	6.1	2.0
6 チャンピオンになりたいから	23.5	21.4	12.2	29.6	9.2	4.1
7 健康のためによいから	62.2	16.3	4.1	10.2	6.1	1.0
8 柔道着がかっこいいから	60.2	19.4	5.1	6.1	5.1	4.1
9 格闘技にあこがれているから	60.2	24.5	7.1	4.1	4.1	0.0
10 友だちと一緒に過ごしたいから	42.9	31.6	15.3	8.2	1.0	1.0
11 体力をつけたいから	46.9	31.6	10.2	10.2	0.0	1.0
12 休日を楽しく過ごしたいから	22.4	26.5	15.3	23.5	10.2	2.0
13 勝つ楽しさを味わいたいから	31.6	25.5	11.2	21.4	7.1	3.1
14 礼儀正しい態度を身につけたいから	37.8	27.6	7.1	20.4	4.1	3.1
15 好きな柔道選手がいるから	9.2	12.2	14.3	42.9	16.3	5.1

(単位 %)

表3 継続動機と「総合的な継続性」との関係

項目	相関係数
1 柔道選手になりたいから	0.184
2 向上心を高めたいから	0.222 *
3 試合に出たいから	0.108
4 友だちができるから	0.049
5 新しい経験をしてみたいから	0.187
6 チャンピオンになりたいから	0.081
7 健康のためによいから	0.027
8 柔道着がかっこいいから	0.077
9 格闘技にあこがれているから	0.214 *
10 友だちと一緒に過ごしたいから	0.211 *
11 体力をつけたいから	0.086
12 休日を楽しく過ごしたいから	0.122
13 勝つ楽しさを味わいたいから	0.238 *
14 礼儀正しい態度を身につけたいから	0.080
15 好きな柔道選手がいるから	0.194

(n=98 *p<05)

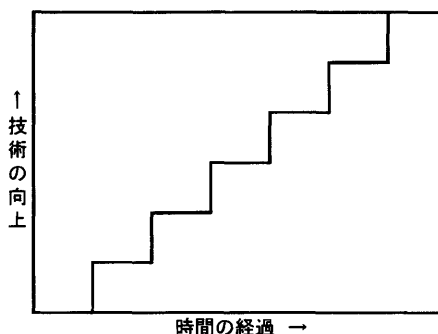


図7 フランスにおける指導システムのイメージ図

の諸点があげられる。

- ①初心者指導については、我が国の伝統的な武道の考え方、指導の仕方よりも、子どもの特質や興味・関心を重視する。
- ②①の初心者指導に関する新しい考え方に基づき、「柔道遊び」の内容を導入した全国統一的な指導教本を作成し、普及する。
- ③進級制度については、子どもの関心・意欲を高めやすいものに改善する。

なお、本報告は2003年度国士舘大学体育学部附属体育研究所研究助成金を受けて行われたものである。

引用・参考文献

- ・FFJDA(1998) METHODE FRANCAISE D'ENSEIGNEMENT DU JUDO-JUJITSU APPROCHE PEDAGOGIQUE DES 6-9 ANS. A.P.B. : Paris
- ・FFJDA(2003) DOJO INFO FFJDA. SEPEG Intl : Paris
- ・関根清文・永田千恵 (1997) “世界一”の柔道人気国！、近代柔道 19(12) : 15-19
- ・徳田喜平 (1988) 少年柔道教室に関する考察―石川県内の少年柔道教室の現状から、金沢大学教育学部紀要 37 : 289-297
- ・右近公洋 (2003) 少年期におけるサッカー継続に関する研究―サッカークラブへの参加動機および活動意欲に着目して―、国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科修士論文

ケート調査から、初心者指導の方法や考え方について以下の4点にまとめることができる。

1. 全体的な指導システムの流れは、図7のようなモデルで説明できると考える。フランスでは、大まかな合格レベルが用意されており、ステップアップしていく方法をとっている。
2. 愛好者の学び方は、個々の特徴が大事にされるが、みんなでできるようになることを重視している。
3. 技の配列から、指導方法を考えると、フランスは、実践的な練習、つまり対人的技能の習得を目標にした「相対練習」が重視されている。
4. 子どもは、子どもであると考え、柔道の前の段階では、柔道とは別の遊びの入ったプレ柔道として取り扱う。

以上のことから、日本における初心者指導のより充実を図るための改善・工夫の視点として、次